全国各地のご遺族に代わって、いつも身近にいてその霊をなぐさめてあげることが、せめてもの務めです

乙飛十八期　引地恒恩

妹　引地友子（茨城）

月日の流れは速いもので、あの盛大な慰霊碑除幕式の式典が行われてから、早や一年になろうとしております。

この度は「予科練之碑保存顕彰会」発足のため、皆様方にはお忙しい中を後々まで、一方ならぬお骨折りをいただきまして、誠に有難く心からお礼申し上げます。

――中略――

碑のその後は、各地からの参拝者の多いことは勿論のことですが、土曜日、日曜日は一般の方々の出入りも自由で、地元の子供会や婦人会の奉仕によっていつもきれいに清掃されております。特に厚生保護婦人会の方々は、常にお花を絶やさぬように心がけて下さいまして、本当に頭の下がる思いがいたします。

また、一部の方はご存知かと思いますが、婦人会長の古谷様は、数々の要職を兼ねもつ身でありながら、肌を刺すような寒い冬の日にも毎日一日も欠かさず水を浴びて慰霊碑の無事完成を祈り続けられました。碑完成のその後もこれを続けられ、慰霊碑の意義を広く世の人に伝え、これからの世代の心のよりどころにしたいと祈願しておられる熱意には、遺族の一人として本当に胸をうたれるものがあります。

このような全国各地の皆様の尊い真心と、好意溢れた結晶として生まれた碑であり、庭園であればこそ、見る人の心を打つものがあるのだと存じます。壮大な庭園に一人立っておりますと、がっちり肩を組んだ像が、生前の兄を目のあたりに見るような気がして、また新たな涙をおぼえます。

それにつけましても、私は当地におりながらなんのお役にも立たず、本当に申し訳なく思っておりますが、ただ私に出来ますことは、北の果てから南の端まで、全国各地におられるご遺族に代わって、いつも身近にいてその霊をなぐさめてあげることが、せめてもの務めであると常に心に念じております。

またこの五月、慰霊碑が、生々とした新緑に包まれます頃、皆様方と再会出来ますことを、心から楽しみにお待ちしております。

（昭和四十二年四月二日号掲載）